―― 翻 訳 ――

James A. Schellenberg, Masters of Social Psychology, Oxford Univ. Press, 1978

押　谷　由　夫

●本書訳出の意図

教育社会学という実証科学を専攻する筆者がつねに痛感するのは、教育事象を分析する際の基本理念に関する問題である。実証科学は対象が無限に拡大でき、かつ豊富なデータも無限に獲得できる。しかし、それがどういった意味をもつのか、また何を明らかにしようとしているのか、さらにいえば、その事象に対してどういった基本理念から分析するのか、といった点を明確にしない限り単なる調査や実態把握のみにおわってしまう。とくに教育という実践と強く結びつく事象を研究対象とする教育社会学において、なおさらこのことが要求される。

ところで、そういった基本理念は、その学問独自の理論をくわしくみることによって獲得できるが、もっとも確かでオーソドックスな方法は、その理論を築いた学者の思想を探ってみることである。筆者も、実証的探究と同時に自らこの学問に対する基礎論を構築しようと様々な学者の理論をみてきた。

教育社会学の中でもどの分野を専門にするかによって対象となるべき学者は異なる。筆者の場合、「子どもの社会的成長過程と環境要因」に関心があるため、主に社会心理学者を対象に考えた。

最初にとりあげた学者は、G.H. ミードである。彼はアメリカ社会心理学の祖といわれ、I（主体的自己）とMe（客体的自己）のダイナミックな相互作用による自我の形成過程に関する独特の理論を発展させた。彼を祖とするシンボリック・インクラクショニズムは、今日、アメリカで最も注目されている理論の一つである。

彼の理論は、我が国でも教育社会学者のみならず、社会学者、社会心理学者全般にわたって大きな影響を与えた。それらの学問の標準的なテキストをみれば、おそらく彼の名前のないものはなかろう。

しかし、ミード理論の欠点は、社会哲学的色彩がこいため、実証科学への適応が、かなり困難な点である。

ミードが不明確なままでいたI（主体的自己）の側面を別の立場、すなわち社会的交換理論の立場から明らかにしたのがホーマンズ(Homans G.C.)である。

彼は具体的な人間の小集団行動や様々な実験結果をもとに社会行動に関する総合理論をうちたてた。筆者は、このホーマンズを第２の研究対象としたのである。

彼の理論的背景は、初等経済学と行動主義心理学であった。とくにスキナーの行動主義心理学を人間の社会的行動に適応できるよう発展させたところに魅力を感じた。つまり、今日の心理学理論のうち最も実践的、操作的教育論の一つとしてあるスキナー理論を基礎

章である、第１章　パラダイムと比喩、のみを掲載する。

まちがいも多々あると思う。大かたのご批判をこう次第である。

I
パラダイムと比喩

経済学者ジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes)は、かって次のように言ったことがある。「実用価値のある人間は、知的な影響力をもつ人々からまったく等閑視されていると思いこんでいる人々であり、つねに、過去の経済学者の奴隷になっている人々である」と。また同じ口調で次のようにも述べている。「権力の狂言者、つまり天の声を聞いていると信じて疑わないものは、数年前のへぼ学者によって熱狂させられている」と(ハイルブローナー 1961. P 2より)。

経済学や政治学と同様、それは社会心理学の理念についてもいえるのである。フロイトをほんの少しでも知っている人は抑圧された願望や攻撃のはけ口を求める欲求について容易に話すかもしれない。それは、ジクムント・フロイト理論の中心的な考えを述べていることになる。また、G.H.ミードやクルト・レヴィンについて聞いたことのない人々でも、社会的行動についての公理を述べるかもしれない。それは、どこかで読んだり聞いたりして理解したものであろうが、彼ら社会心理学者の基本理念を含んでいるのである。かつ、過去の強化を基礎として、社会的行動を説明することは、―― 強化という今日の行動主義の中心用語さえも使っている――たとえあいまいであっても、心理学者のB.F.スキナーの名前になじんでいる多くの人々にとっては、ごくふつうのことなのである。

偉大な社会心理学者が言ったことは、社会的行動に関する我々の日常会話の中に入り込んできている。それは、単に我々が彼らの用語のいくつかを使うということだけでなく、彼らの用語が意味をもつようになるパースペクティヴに吸収同化されてしまうからである。しかし、ここに問題がおこる。我々は、これらのパースペクティヴをかなりいいかげんな形で吸収するからである。つまり、これらの異なった理論を相互に適合する方法に関して混乱が生じているのである。

日常生活における社会的行動に関する理論の混乱は、社会心理学という学問固有の副産物でもある。人々に社会心理学の道案内をするのが困難な理由の１つは、社会心理学の理論すべてに適合する単一の一般的なパースペクティヴというものが存在しないからである。多くの様々なパースペクティヴが存在するし、かつその中に今日支配的といえるものもないのである。最近(特にクーン〔1962〕以来)流行していることばを使えば、社会心理学は単一の統一された“パラダイム”をもたない科学である。研究対象を選定したり調査研究を企画したりするのに、基本的に異なる様々な方法をもっている。入門書的なテキストでは、社会心理学はマルティ・パラダイム科学であるとごまかしているかもしれないが、そのことが、この領域を研究しようととりくんでいる人々に苦痛と混乱を起させる１つの源泉となっているのである。

社会心理学において“科学をする”ためには、基本的に異なるいくつかの方法があり、それらは、独自のすぐれた理論的パースペクティヴを持っている。これらのパースペクティヴには少なくとも次の４つがある。

にしながら、ミード以来重要でありながらその実証的解明の困難であった人間の主体的自己の確立を追求しているために、より教育的な社会行動理論としてとらえられる、と考えたからである。

今、この延長線上で、「子どもの規範形成過程に関する考察」など一連の理論研究を進めている。

そんなおり、いままで自分が関心をもった社会行動理論に同じような興味をもつ著者の本にふれた。それが、これから翻訳しようとする本書である。筆者は、James A. Schellenberg、原題はMasters of Social Psychologyである。

本書の構成は次のようになっている。

Ⅰ　パラダイムと比喩

Ⅱ　ジクムント・フロイトと精神分析

Ⅲ　ジョージ・H.ミードとシンボリック・インタラクショニズム

Ⅳ　クルト・レヴィンと場理論

Ⅴ　B.F.スキナーとオペラント行動主義

Ⅵ　巨匠たちの盲点

Ⅶ　社会心理学の不変的な型

ミードと同じ時代にまったく別の観点から、同じような社会的自己の形成を主張したのが、フロイトであった。彼の理論もまた、後の世に与えた影響ははかりしれない。

レヴィンはアメリカのグループダイナミックスの創始者で、いわば小集団研究の権威者である。このレヴィンとスキナーの結びつきは、先に第2の研究対象としてあげたホーマンズを媒介として可能となる。彼はレヴィンのグループダイナミックスが大きなウェイトを占める小集団研究から出発し、後スキナーの行動主義心理学に接近したのである。

このような事情を考えるとき、これら4人の学者は、社会心理学における巨匠であるのみならず、筆者の理論的基盤を形成するうえでも最も重要な巨匠である、といえるのである。

この本を手に入れたとき、まず、この4人をとりあげているのがきにいった。そして、第2に、彼らの理論の開発を彼らの生活体験との関連で明らかにしようとしている点。従って、そこから不十分ながらも自らの生活経験との関連で追体験が可能ではないか。そのことが、自らの学問的基盤を形成するうえで大きな助けとなりはしないか。第3に、さらに彼らの理論の後継者達によるその後の発展についてものべている点。またそれらを相互に検討しながら社会的行動理論の今後の方向などもあわせ追求しているところが大いにきにいった。

以上の個人的関心とは別に、さらにもう一つの理由がある。人間を対象とする仕事につく人、また人間の社会的行動に何らかの関心をもっている人が多いにもかかわらず、彼らの社会的行動に関する理解がきわめて乏しい点である。難解な理論がきわめて平易に書かれている本書は、きっと多くのそういった人々に役立つであろうと思ったからである。

以上の理由から、浅学非才をもかえりみずあえて本書を翻訳しようと志した訳である。とはいえ、本書を入手したのが遅かったのと、筆者の怠慢からきわめて少しの部分しか訳出できなかった。

大かたは次回以後にまわすとして、今回は、本書の全体を知るうえで最も重要な導入的

●精神分析的アプローチ ── これは社会的行動の原因を個人の内的な感情力に見い出そうとする。

●象徴的相互作用的パースペクティヴ ── 行動を特定の社会的文脈の中で主観的に決定されるものとしてとらえる。

●ゲシュタルト的アプローチ ── 行動の基礎として有機体の即座の認知を強調する。

●行動主義的パースペクティヴ ── 個々の特徴をもった過去の行動の産物として、現在の行動を考える。

これらの各アプローチは、それぞれが固有の研究方法を開発してきた。かつ、それぞれが、特に2・3の学者の主要な貢献によって開発されている。事実、今日の社会心理学に及ぼす全体的な影響力という点からみれば、上記したアプローチのそれぞれについて最も卓越した代表者とみなせるひとりの人物を選ぶことはかなり容易である。それらの人々は、社会心理学の巨匠たちなのであって、この本で主要にとりあげている。

ウィーンに住むひとりの若き医師が、病気の形態と感情的に結びついている患者の精神を注意深く調べながら、徐々に無意識の心的力についての理論を構築するに致った。つまり、実践を行いながら、精神分析の理論を必然的に開発していったのである。この医師、ジクムント・フロイト(Sigmund Freud)は後、とくに社会的影響過程に興味をもつようになった。そうして、精神分析が社会心理学の基本的な問題に適応されるようになったのである。その結果、臨床の洞察をさらに多様にしたのみならず、今日の社会科学がとりあげる社会化論のうち最も論理的で魅力的なものとなった。

ほとんど同じ頃、アメリカの大学教授が、哲学専攻の学徒とともに、人間の本質として特徴づけられるものは何か、を研究した。この教授は、個々人の相互作用は、象徴的な印象の発達によって高められ、人間の自我を形成する第1の要因である、と考えるようになった。この過程に関する独自の理論が、G. H. ミード(Meed G. H.)を社会心理学の潮流のひとつであるシンボリック・インタラクショニズムの中心人物にしているのである。このパースペクティヴは、社会学を基盤とする社会心理学者の間にとくに普及しており、社会化や小集団行動、さらに制度的環境(Institutional Setting)の影響に関する研究に広く適応されている。

ドイツのナチ軍からのユダヤ人逃亡者がアメリカへ渡ったとき、彼は、まるで伝染病にでもとりつかれたかのように理論の構築に熱中し、社会改革への意欲をかりたたせたのである。アメリカにおいて、彼、クルト・レヴィン(Kurt Lewin)のすぐれた才能が新しい統合に向けて発揮されたのである。この統合は"場理論"として知られ、レヴィンがドイツ時代に学んだゲジュタルト心理学の影響を大きくうけている。だが、また、それがグループダイナミックスやアクション・リサーチの中で発展したことからわかるように、はっきりとアメリカの学風をもったものでもある。アメリカにおける今日の社会心理学は、どんな研究グループよりも、レヴィンとその研究グループによって、より強い影響を受けている。

B. F. スキナー(Skinner B. F.)は、フロイトやミードやレヴィンとは非常に異なったタイプの研究を行っている。スキナーは、技術ごのみの性格と、革新的行動主義の哲学とによって、社会行動をみるきわめて単純なモデルを導き出した。にもかかわらず、スキナーが、ハーバード大学の実験室に飼われていたねずみを研究することで初めて開発したオ

ペラント行動主義は、20世紀心理学に一大変革をもたらしたのである。この変革を導いたひとつの要因は、スキナー自身の関心が、自分のモデルを、複雑な形態をもつ人間の行動にも適応することにあったことである。これらの労作の本格的な影響が、ちようど今、社会心理学の中で感じられはじめている。

もちろん、精神分析、シンボリック・インタラクショニズム、場理論、オペラント行動主義のそれぞれに貢献した主要人物は他に多くいる。しかしながら、開拓者として、フロイト、ミード、レヴィン、スキナーは歴然と存在する。彼らはそれぞれ、社会心理学を研究するにあたり、異なったわく組みと、異なったパラダイムを明らかにしているのである。

この章の冒頭で、一般市民の思考に入りこんでいる経済学者や政治哲学者の強い影響力について、ケインズ卿の説を引用した。同様の観点から、我々は、主導的な社会心理学者、少なくとも我々が“巨匠”として想定できると考えている人々の影響が、一般市民の思考の中に入りこんでいるであろうことを示してきた。さらにこの点を、社会心理学者が研究しているものと、日常生活で関心がもたれているものとの関連性を論及することで、とくに強調したい。

社会心理学という新しい学問が出現したのは、20世紀であり、── 当時は、伝統的な学問である社会学や心理学が、対人行動の研究を引き受けていた──以後独自の斬新な理論や研究方法を開発していった。“Journal of Personality and Social Psychology”や“Journal of Experimental Social Psychology”や“Sociometry”といった雑誌の中でとりあげられた基本的な文献をみると、それらの著者は、このきたるべき科学にほとんどしろうとであることがわかる。その理由の多くは──まったくとはいえないまでも──社会心理学が常にたいていの人々がもっている基本的な問題に関心をおいていたからである。しかし、社会心理学者の研究をふりかえってみると、次のごとき基本的な問題にぶちあたる。いかにして我々は社会の成員として機能するよう学習するのか。いかにして我我は、進行中の相互作用において他者から影響をうけるのか。どのようにして我々の思想や行動が社会の特性、たとえば、マスメディアを通して、あるいは特定の集団行動を通して我々に達するもの、によって影響されるのか。

これらの問題はまた、生活を営んでいるほとんどの人々にとって直接的な関心事でもある。そして、このことが、社会心理学という学問と普通の人々が非常によく行うインフォーマルな観察との間に共通の結びつきをつくる。社会心理学者はしばしばしろうととの、この結びつきを不愉快に感じる。彼らは、自分の仮説や調査研究が、一般的感覚からいかにズレているか指摘されるのを苦痛に思うからだ。確かに、社会心理学者は、より専門的な努力によって、諸特性を区別したり、たいていの人々に想像すらできないような行動の微妙な差異を観察したりする。しかし、社会心理学という学問と、あらゆる人々が考えている一般的な心理学との間には、このような違いがあるものの、その背後には常に共通のテーマがある。双方とも、社会行動についての幅広い真実、すなわち、科学者も一般の人も同様に受け入れることのできる明白な真実を捜しているのである。

ローゼンバーク(Milton J. Rosenberg)は、社会心理学の多くの実験の“比喩”機能に言及することで同様の指摘をしている。一般の社会科学理論が、多くは俗人の宗教学、すなわち、社会的宇宙の中での我々の位置や目的を考える方法、として残るかもしれないのとまったく同様に、同じような意味で、社会心理学者が行う特定の実験は比喩としてみな

されるかもしれない。ローゼンバークのことばを使うならば、彼らは“具体的な表現のしかたで、広範囲に、かつこの世をとりまとめたような真実を公表する。しかも「認識のショック」や洞察力のおののきを引き起すような劇化された状況下で明らかになったものを公表するのである”。(ローゼンバーグ 1970、P 181) それらは、いいかえれば、ひとつの小さな尺度で人間の経験についてのより広範囲な真実を具体的に表現しようとしている。実験結果が訴えているのは、研究者が明白に指摘していることのみでなく、その実験の考察の中でつねにそれとなく表現される、このより広範囲な真実についてなのである。

ローゼンバーグが示しているように、社会心理学で最もよく知られている調査研究のいくらか――同調に関するソロモン・アッシュ(Solomon Asch)の研究、従順に関するスタンレー・ミルグラム(Stanley Milgram)の研究、レオン・フェスチンガー(Leon Festinger)の認知的不協和に関する実験など――は、そのような例としてみることができよう。これらはすべて、社会的動物としての我々の本性に関する基礎的な考え方のいくつかを鋭く明快に示している。たとえば、我々は過度に仲間に同調したり、権威者の命令を受け入れる傾向のあること、またしばしば、自分の行為を正当化するために、非理性的になる傾向のあることなどである。

特殊な実験でも正しいと考えられるものは、また、より一般的な理論に適用される。社会心理学者の実験では、しばしば我々のふだんの経験の一部が、より一般的な理念を説明するためにとりあげられる。彼らの理念体系にてらして、人間の社会生活についての共通概念をとり出し、よりフォーマルで論理的な用語でそれを表現する。とはいっても、実質的には、社会心理学者が考えていることと、一般市民の考えの中にあるものとは、基本的な関連性がある。

しかし、社会心理学者と一般人との考えの関連性を指摘するのは、社会心理学者は単に日常生活の一般的な仮設を自らの理論に取り入れているにすぎない、というためではない。たしかに、ある人々――たとえばフリッツ・ハイダー(Fritz Heider)(1958)――は社会心理学者は、人々が一般的に自らの行為をまとめたいわば素人心理学を研究することから多くを学びうる、と論じている。しかし、他の多くの学者は、別の方向を強調する。すなわち理論は、一般的に考えられうるものよりも、むしろ、体系的に形成された理念を提供した学者の書物から生まれる、と。社会心理学者は、それらの学者の考えを取り入れているのである。さらにいえば、彼らの強調点は、各人が最もよく知っている学者の行った調査結果と符合するのである。

この導入的な章で、我々は今までに主に2つの点を指摘した。第1は、社会心理学には卓越したいくつかの違ったフレームワークないしパラダイムが存在し、かつそれぞれが、とくに影響力をもつ理論家の思想と結びついていること。第2に、社会心理学における主導的な理論を展開している論文は、我々が日常生活で求めていく中心問題と密接な連関を示していること、である。これらの2点は、第3のポイントを導く。社会心理学における主要なアプローチを十分に理解するには、それが形作られた生活状況をさぐってみるとき、最もよく把握できる。それゆえ、我々は主導的な理論や、さらに理論家についての詳しい情報をとりあげたりすることから出発するより、むしろまったく逆の方向から進めていこうと思う。まず、理論を開発した生活状況を示す自伝的資料を示そうと思う。それから、

その状況から生まれてきた理論的アプローチの主な概要を明らかにする。最後に各アプローチのその後の発展を、とくに、今日の社会心理学への影響を中心に論じようと思う。

いいかえれば、我々はまず、我々の巨匠の生涯をとりあげる。彼らの理論の開発と関連したでき事に注意をむけることで、それらの理論の重要性をより正確に評価できるにちがいない。またとくに、このことは、我々に、社会心理学の主導的な理論と、啓蒙されるのに役立つであろう日常経験のでき事との間の関連性をより明確に理解させ、敏感にさせるにちがいないのである。

（以下　次号）

高松短期大学研究紀要

第　10　号

昭和55年3月1日印刷
昭和55年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町2158